

昼の片隅にて

真昼の影に潜み
雲を映し出し
空ろな瞳

舗道を滑空するトンボが
幾何学的な動作を従え
かの絶望を虚空の中に葬る

ベランダにたなびく白いシート
その影の透明さ
風はまだそれに気づいてない

全ては目の細かい網を通じて存在し
つややかさも、質量感も
薄められ、柔和になっている

その中にお前は息を殺して潜み
産卵のときが来る、と慄えている
自らの内部から来る、と慄えている

(2001.9.18)